

『一神教学際研究』第5号 2009 (抜刷)

JISMOR

(Journal of the Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions)

開会の辞

「愛なきところに真理なし」

手島 勲矢

同志社大学
一神教学際研究センター
(CISMOR)

開会の辞

「愛なきところに真理なし」

手島 勲矢

来賓の皆様また同僚の皆様、この度は、京都、一神教学際研究センター（CISMOR）のワークショップにご参加いただき感謝申し上げます。これから二日間、私たちはお互いに傾聴しながら、「他者」という概念について考えや見方を交換するわけですが、私にとっては、それは人間存在において「私たちのもの」と「彼らのもの」という具合に分離している言葉について考え、また再考することを意味します。

このワークショップの着想は、ヤコブ・ラブキン教授よりいただいたものです。彼は昨年（2008年）に日本で二ヶ月間に亘り、講演をおこない、多くの友人をつくられました。その中に、パレスチナ人の正義について関心をもっておられる、地域研究また現代アラブ文学の学者の板垣雄三教授、岡真理教授もおられるわけです。ラブキン教授は、この経験を十二分に喜び、それゆえに CISMOR および他大学に向けて、国際レベルでの三つの一神教とそれらが直面している問題に関する「対話」をホストすることを提案されたのだと思えます。

私は、今回のワークショップは世界においてもユニークなものと考えます。なぜなら、それはイスラーム、ユダヤ、そして日本（または日本のキリスト教）を一緒に扱うからです。明らかに、このワークショップの視点は、単にイスラームとユダヤの間の関係をめぐる問題に限られるだけではなく、その問題意識にはイスラームと日本の関係にも、またユダヤと日本の関係も含んでいます。言葉をかえれば、このワークショップは多面的で複雑になることが約束されているものであり、それは単に政治や宗教に関する白黒のイメージの意味を論じ合うというだけでなく、私の希望ですが、それは私たち自身についても、すなわち、私たちのアカデミックな努力についても反省する機会でもあるということです。私たちは、無論、パレスチナ人のための公平なる正義とイスラエル国家の生存権などの政治的に難しい問題の議論からも逃げはしませんが、他方、たぶん、私たちは私たち自身についても考えなおすこと、つまり「私たちのもの」「彼らのもの」と色分ける言葉（思考）そのものについても理解し直すことをしなければならぬと思います。

実際、このワークショップの原題「イスラームとユダヤの対話について：再考中の

『彼らのもの』『私たちのもの』(On Dialogue Between Islam and Judaism: 'Theirs' and 'Ours' in Rethinking)には、私自身が再考したもの、つまりこれまで行ってきたCISMORの対話は「私たちのもの」「彼らのもの」の観念の境界を越えていくにはまだ十分でなかったことについての私の反省も意図されているのです。それゆえに、これからの二日間、他者という概念をめぐる多くのイスラームとユダヤの見方や事実について学ぶことになるとと思いますが、同時に、私から皆様へのお願いは、アカデミックな言語の《根本的な不十分さ》についてもご記憶いただきたいということです。つまり、私たちが用いる言語(思考)は、「私とあなた」という真のダイアログを疎外している言語でもあるということです。この挑戦が小さいものではないという一つの理由は、現在の哲学や歴史の訓練がある種の他者と自己の概念に根ざした《言葉の客観性》に固執する言語だからです。つまり、それゆえに、私たちは他者に関する断言や描写や観察をする場合に三人称で行うことに全力を尽くすわけであり、その三人称を使う理由は、自分の認識が自分の目の前に存在するその人に対する感情に左右されないようにするためでもあるのですが、この三人称で語る客観性の重要性を皆様と一緒に、このワークショップを通じて吟味し、また「客観的な真理」とは何を意味するのか問い直すことができるなら素晴らしいことだと私は思います。

このことに関して、聖書は一つのインスピレーションを与えてくれます。詩篇またユダヤ教の古典的な祈祷テキストは、実際、「私とあなた」という対話の言語に満ち満ちています。「わが口の言葉と、わが心の思いが、あなたの前で、あなたの喜びとなるように。主様、私の岩、私の贖い主よ」(私訳、詩篇19:15)

私は、この祈りの言語(=対話の言語)のことはイスラームにおいても同様であると信じていますが、この観点から、私は、私たちの努力は「わたしたちのもの」「かれらのもの」という認識の区別の長所においてなされるべきで、ゆえに(ワークショップにおける)言葉は厳密にアカデミックであるべきだと主張します。つまり、「あなたのもの」という言葉(二人称)は(感情が伴う厄介さの言葉ゆえに)神に向かって述べるためにのみ、つまり私たちが平等で同じであると私が信じる純粋な祈りの心のためにのみ、(二人称は)取っておくのです。私は祈ります、「神の公平さによって『私たちのもの』『かれらのもの』という区別に関する私の理解が光に照らされますように。そして、私たちが部分的にも対話に関する偏見を乗り越えることができる方向に進みますように、またこのワークショップがアカデミックな言葉、三人称の言語の重要性を理解し、それを使うことの助けとなるように」と。

中田考教授と私は、四年間、同僚としてともに共働してきました。私たちは学問訓練や情報においての違いを自覚していますが、私たちを結び付けている一つのものがあり

ます。それは、イスラームとユダヤの真実に対して——神をおそれつつ——敬意を抱いているということです。つまり私たち二人は、宗教的なロジックと見方に対して義務感と敬意を抱いているわけで、それは私たちがそれぞれに、イスラームの、またユダヤ教の、恩師より受け継いだものに他なりません。

それゆえに、もちろん、私は、私たちの間に、私たちがパレスチナ人について、イスラエル国家に関して言及したりするとき、緊張があることは認めます。だけれども、私たちはお互いに学びあってきたのであり、私にとって彼は、西欧近代・世俗主義が持つ偏見を追究するときにはすばらしいパートナーです。私たちの対話を通じて、私は自分自身こそ「私たちのもの」「かれらのもの」という言葉の見直しを必要としているその人であるとみなすことも可能だと感じています。

私は、この機会に、イスラームとユダヤの真実について知ることを、また誤解や幻想を取り払うことを楽しみにしています。このワークショップを通じて、時に、私は私が「私たちのもの」「彼らのもの」と理解していたものについて考え直す多くの瞬間に遭遇することも予感しています。そして、ときに、真実なアカデミック的なやり取りも期待します。なぜなら私は自分の研究対象を愛しているからであり、その対象（ユダヤ教）の完全な真実を、より間近に、より明らかに、見ることを望んでもいるからです。そのためには、私は、私自身を考え直し変わる用意をしておくことがなければいけませんし、また私の愛する対象に関しての言葉の中に間違いを聴くときにそれを正すという勇気もなければなりません。

旧約学者フーゴー・グレスマンは「真実な客観性は、常に、愛を必要とする」(Edward K. Kaplan, *Abraham Joshua Heschel*, 104参照)と信じていました。同じように、私も「真理」と「愛」はお互いに相互補完的であると信じています。すなわちイスラームの完全な真理を語るためには、イスラームに対する真実な愛が要求されるのであり、同様に、ユダヤ教の完全な真理は、ユダヤ教への真実な愛抜きには語ることはできません。このように、私のアプローチは対象を理解するうえで「真理」と「愛」を分離させないので、たぶん、西欧的な「科学」の基準からは、「盲目なもの」「偏見に毒されたもの」と糾弾されるかもしれませんが、19世紀のユダヤ学者的な倫理にしたがい、むしろ、ここで私が語るどころの種類「愛」は完全なる真理の理解の土台ですらあると反論します。なぜ?といわれるなら、それは、誰もその人が本当に愛する者について嘘は聞きたくないはずだと私が考えるからです。誰も、その人の真実を知らずに誤魔化されたままでは、その人を真実に愛することはできません。要するに、《全部の》心で彼らの対象を愛する者は、否応無く、《全部の》心でその対象の《全部の》真実を追究せざるをえないのです。

私は、学術の世界に、また全部の真実を追究しているこの場におられる皆様に、大きな誇りを感じています。実際、誰も、自分が本当に気にかけていない物や人について、全部の真実を聞こうとしたり語ろうとしたりすることに本当に気をつかうことはしません。ましてや、もしかしたら、その人は半分の真実を聞くことのほうが望ましいと思うかもしれない、また自分の憎む物や人を傷つけることができるなら嘘を語ることもさへも好むかもしれません。この愛の戒めに縛られて、19世紀のユダヤ学者、L・ツンツ (1794-1886) やN・クロフマル (1785-1840) などは、ユダヤ教の歴史的な真実 (Die Wissenschaft des Judentums) を追究しました。私は、19世紀から20世紀にかけてのユダヤ学者のユダヤ研究は——同時代のキリスト教学者の研究がしばしばキリスト教神学や自己中心的な世俗の哲学の進歩のためになされたご都合的な研究であるのとは対照的に——それらとはまさに《愛》において区別されるべきユダヤ教研究だったと考えています。いずれにせよ、皆様の思想にとっての「挑発的(?)」な私の言辭はこれぐらいにして、わたしも耳を傾ける時間がきました。傑出した来賓研究者の皆様、バカル教授、カマリ教授、ベンバッサ教授、ラブキン教授、私たちとご一緒していただき、日本における学術的な一神教研究を拡大・刺激してくださるために、その学識を私たちと共有してくださる皆様のご厚意に心より感謝申し上げます。それでは、最初のセッションを始めましょう。